

いのちの葉

わかろうとする愛

堀
浄信

目次

はじめに	4
お母さんからバトンを受け取る	6
大きな大きなつながり	10
いつか人生を振り返る時に	14
過去の事実は消せないが	18
自立とは、優れた依存のこと	22
私たちにできることは？	26
受け入れたことで前に進める	30
子どものいのちを守る責任	34
「受け手」の思いをきかせる	38
子どもとどう接するの？	42
おわりに	46

おじめい

児童養護施設 光明童園ひかりどうえんは、戦争により保護者を亡くし街を浮浪する子どもたちのために、一九二七年に開設されました。

物も金もなかった時代、ただ子どもたちの命を守ろうと、西念寺住職であった堀圓乗えんじょうがはじめた施設です。運営にあたっては、「親鸞聖人が述べられた『世のなか安穩なれ』の願いのもと、誰もがいつくしみ(慈愛)をたたえた眼差しを持ち(眼施げんせ)、全ての人が尊ばれ、社会の一員として重んじられ、良い環境の中で安心して共に生かされ生きる社会をめざす」を理念としています。日々の生活においては、「和顔愛語わげんあいご」を大切に、「報恩感謝ほうおんかんしゃ」の実践を目標としています。

児童養護施設は、その時々々の社会問題の縮図を表します。戦災孤児から始まり、非行、不登校、いじめ、児童虐待、貧困等、社会が作り出す課題が、社会的弱者である子どもに降りかかります。子どもたちは、私たち大人が形成している社会の「犠牲者」といえます。本当は家族と生活をしたいくて、施設になんか来たくなかったかもしれない子どもたちです。その小さな身体の心の中には、計り知れないさまざまな思いがあるのだろうと想像します。

光明童園では、長い歴史の中で子どもたちと職員が大家族のように、賑やかに慌ただしく、いのちを紡いできました。そしてたくさんの子どもたちが巣立っていきました。不思議なご縁で出遇あわせてもらった子どもたちの様子をお伝えして、みなさまにもその思いを少しでもご想像いただけましたら幸いです。

お母さんからバトンを受け取る

ママのおはなしして

真夜中の出来事

二歳の愛ちゃんはお母さんとお姉ちゃんと三人で暮らしていました。ある日、病気がちだったお母さんが家の中で倒れ、そのまま亡くなってしまいました。幼かった二人は、お母さんが亡くなっていることがわかりませんでした。声をかけても起きないお母さん。不安な気持ちを抱えながらも、どうすることもでき

きませんでした。

数日後、近くに住むおばさんが「連絡がとれない、様子がおかしい」と家に来てくれ、ようやく発見されました。

グループホームで生活する四歳になった愛ちゃんのある日の夜中のことです。愛ちゃんは目が覚めてしまい、宿直をしていたいずみさんの元へやってきました。少し寝ぼけた愛ちゃんは、いずみさんに「だれ？」と言いました。

「私だよ。メガネをしていないから、わからなかったね。びっくりした？」

「ママが来たのかと思った」

「ママに会いたいね」

「ママのおはなしして。ママとね、みかんも食べたよ」